

図9 3次元測量点群図 C-C'断面  
(石垣解体前、西から)

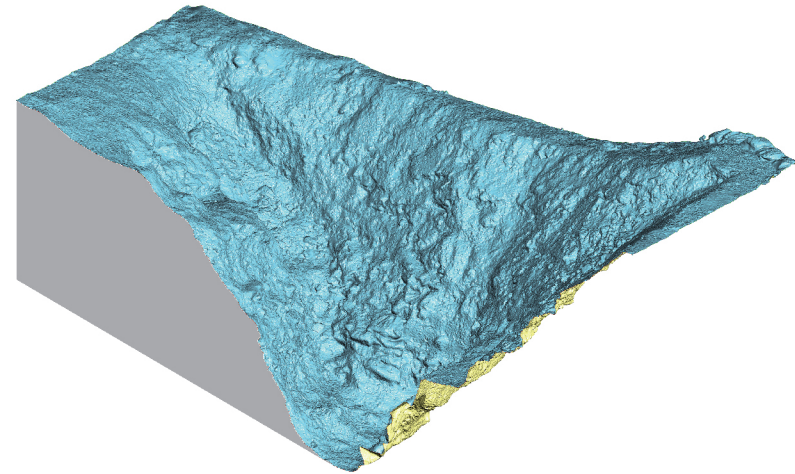


図10 3次元測量点群図 C-C'断面  
(石垣解体後、西から)

# 姫路城城下町跡

## —姫路城跡第366次発掘調査報告書—



写真1 調査区全景(南西から)

報告書抄録								
ふりがな	ひめじじょうじょうかまちあと—ひめじじょうあとだい366じはっくつちょうさほうこくしょ—							
書名	姫路城城下町跡—姫路城跡第366次発掘調査報告書—							
シリーズ名	姫路市埋蔵文化財センター調査報告							
シリーズ番号	第54集							
編著者名	黒田 祐介							
編集機関	姫路市埋蔵文化財センター							
所在地	〒671-0246 兵庫県姫路市四郷町坂元 414番地1			TEL (079) 252-3950				
発行年月日	平成29年(2017年)3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
ひめじじょうじょうかまちあと 姫路城城下町跡	ひょうごけんひめじしのみまち 兵庫県姫路市忍町67の一部	28201	020169	34° 49' 47"	134° 41' 18"	2016. 11. 10 ～ 2016. 11. 22	12㎡	共同住宅建設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		調査番号		
姫路城城下町跡	集落跡	江戸時代	外堀石垣	陶磁器		2016359		

### 例言

1. 本書は、姫路市忍町で実施した姫路城城下町跡(県遺跡番号020169)の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、姫路市忍町67の一部における共同住宅建設工事に伴い、事業者である株式会社ワールドウィステリアホームズと委託契約を締結し、姫路市教育委員会が実施した。
3. 発掘調査は、平成28年11月10日から同年11月22日にかけて実施した。調査面積は12㎡である。
4. 本書の編集・執筆は姫路市埋蔵文化財センターがおこなった。
5. 本報告にかかわる調査の記録、出土遺物などは、すべて姫路市埋蔵文化財センターで保管している。
6. 発掘調査・報告書作成に際して、下記の方々にご援助を頂きました。記して感謝申し上げます。  
株式会社ワールドウィステリアホームズ、国際文化財株式会社、安西工業株式会社、株式会社アコード

### 凡例

1. 発掘調査で行った測量は、世界測地系(測地成果2000)に準拠する平面図直角座標系第V系を基準とし、数値はm単位で表示している。
2. 本書で用いる標高は東京湾平均海面(T.P.)を基準とし、使用する方位は世界測地系の座標北である。
3. 土層の色調は、小山正忠・竹原秀雄編2003『新版 標準土色帳 25版』日本色研事業株式会社に準拠した。

姫路市埋蔵文化財センター調査報告 第54集

### 姫路城城下町跡—姫路城跡第366次発掘調査報告書—

発行日 平成29年(2017年)3月31日  
 編集 姫路市埋蔵文化財センター  
 〒671-0246 兵庫県姫路市四郷町坂元 414番地1  
 発行 姫路市教育委員会  
 〒670-8501 兵庫県姫路市安田四丁目1番地  
 印刷・製本 内海印刷株式会社  
 〒670-0808 兵庫県姫路市白国五丁目12-41

2017

姫路市教育委員会



## 1. 調査に至る経緯と経過

姫路市忍町67番の一部において、株式会社ワールドウィステリアホームズによる共同住宅の建設が計画された。当該地は周知の埋蔵文化財包蔵地である姫路城城下町跡（県遺跡番号020169）に該当しているため、平成28年（2016年）8月9日と8月25日に確認調査を実施した（遺跡調査番号20160204、姫路城跡第361次調査）。調査は2m×1mの調査区を3箇所、計6㎡で実施した。その結果、外堀推定位置に設定した調査区において、外堀石垣が確認された。それ以外の2箇所については、既存建物による攪乱により遺構が確認できなかった。

以上の結果から、株式会社ワールドウィステリアホームズと姫路市教育委員会 生涯学習部 文化財課の間で協議をおこない、事業者の協力の下に、建物基礎に伴う掘削が外堀石垣に達する12㎡を対象に本発掘調査を実施することになった。平成28年10月27日に『姫路市忍町67番の一部の開発に伴う埋蔵文化財（姫路城城下町跡）発掘調査委託契約』を締結し、11月10日から11月22日の期間で本発掘調査を実施した（遺跡調査番号20160359）。調査では石垣の3次元測量などによる記録作成をおこなった後、石垣を解体し、掘方などを記録した。なお、今回出土した石垣石材は、今後姫路城跡の石垣修理などに活用するため、別地へ運搬し保管している。

本発掘調査終了後に出土品整理及び発掘調査報告書の作成をおこない、本書の刊行をもって事業を終了した。

## 2. 調査地の位置と既往の調査

姫路城は、池田輝政により慶長六年（1601年）から9年の歳月をかけて築かれた平山城である。大天守が築かれた姫山を中心に内堀、中堀、外堀の三重の堀がめぐられ、武家屋敷や町屋などを囲い込む惣構の縄張りが採られている。今回調査を実施した忍町67番は、大天守から南南西に約1.2kmに位置しており、絵図によると調査地は姫路城外堀及び土塁、武家屋敷地、街路に該当することがわかる（図1）。

調査地周辺ではこれまででも開発工事などに伴う発掘調査を実施しており、外堀に関連した調査としては姫路城跡271・276次調査（南町22-1・14-1他、調査番号20110221・20110334・20120077・20120231）、290次調査（忍町83番・75番、調査番号20120216）がある。前者の調査では外堀埋土を確認し、現況地盤（標高約12m）から3.8m下で堀底を確認した。さらに堀の立ち上がりを確認したことで、堀の位置を概ね確定できた。後者では石垣は残存していなかったものの外堀埋土の広がりや遺構の分布状況による土塁位置の推定などから、『姫路侍屋敷図』の描写と比べて、実際の外堀位置が数メートル北にずれている可能性が指摘された（姫路市埋蔵文化財センター2013）。これと同様の事例として、姫路市市道幹第8号線（十二所前線）において実施した328次調査（調査番号20140290）で確認した街路の位置が絵図の描写と比べて北にずれていることが挙げられる（姫路市埋蔵文化財センター2016a）。これらについては図2にまとめた。なお、今回の調査区は南町で確認した外堀北面の延長線上に位置している。

## 3. 調査の成果

外堀北面の石垣を確認した。現存する石垣の高さは約2.5mで、石垣の天端は標高10.25m、現況地盤から1.2m下で確認した。また、堀底は標高7.8mである。石材としては凝灰岩が中心に用いられており、明確な加工痕や矢穴は認められない。目地は通らず、石垣の傾斜角度は62°前後である。石垣東半では石同士が噛みあい、間詰石が確認できる一方で、西半では石同士の噛み合わせが甘く、隙間が大きい。西半部の基底石が南に大きく張り出していることから、石垣がずれ動いている可能性がある。石垣裏込めには10～20cm大を中心とした円礫が用いられていた。

石垣解体後に検出した掘方は傾斜角度45°前後で、上端部付近では28°である。石垣上部がどの程度失われているかは不明だが、掘方上半の傾斜角度が下半に比べて緩やかであった可能性がある。

また、近代以降外堀は埋められていったと考えられるが、その際外堀跡に石組溝を構築している事例が南部外堀で複数確認されている（姫路市埋蔵文化財センター2014・2016c）。今回の調査でも石垣前面で石垣の石材を転用したとみられる石組が確認されている。

## 4. 総括

今回、姫路城南西部外堀において初めて石垣を確認した。石垣は一部にずれがあったものの、保存状態は概ね良好であった。この石垣の確認によって、調査地近辺の外堀位置をより正確に把握することが可能となった。図2にまとめた通り、発掘調査で確認された外堀北肩は絵図の描写より北へずれている。また、271・276次調査では南肩のラインも確認しており、この地点の外堀幅は約22mと絵図による想定より広いとみられる。さらに、今回と271・276次調査の外堀北肩をつなぐと、絵図の描写との間に角度のずれが認められる。なお、そのラインは外堀上を通る今回の調査区南の道路と平行しており、外堀の旧状を反映している可能性は高いといえる。現状では推測も含めて記述をせざるを得ないが、今後の調査の進展によって、より詳細な外堀位置の確認が待たれる。また、他所で確認された外堀石垣との比較をしてみると、調査地から850m東方で実施した334次調査（朝日町56番）で確認された石垣は底が標高約9.5m、石垣天端は標高11.8mと（姫路市埋蔵文化財センター2016b）、今回確認した石垣と比較すると、底の標高に1.7mの差があることが判明した。

### 【参考文献】

姫路市埋蔵文化財センター2013『姫路城下町跡—姫路城跡第290次発掘調査報告書—』（姫路市埋蔵文化財センター調査報告第8集）  
 姫路市埋蔵文化財センター2014『姫路城下町跡—姫路城跡第302・308・312次発掘調査報告書—』（姫路市埋蔵文化財センター調査報告第23集）  
 姫路市埋蔵文化財センター2016a『姫路城下町跡—姫路城跡第328次発掘調査報告書—』（姫路市埋蔵文化財センター調査報告第32集）  
 姫路市埋蔵文化財センター2016b『姫路城下町跡—姫路城跡第334次発掘調査報告書—』（姫路市埋蔵文化財センター調査報告第35集）  
 姫路市埋蔵文化財センター2016c『姫路城下町跡—姫路城跡第343次発掘調査報告書—』（姫路市埋蔵文化財センター調査報告第41集）

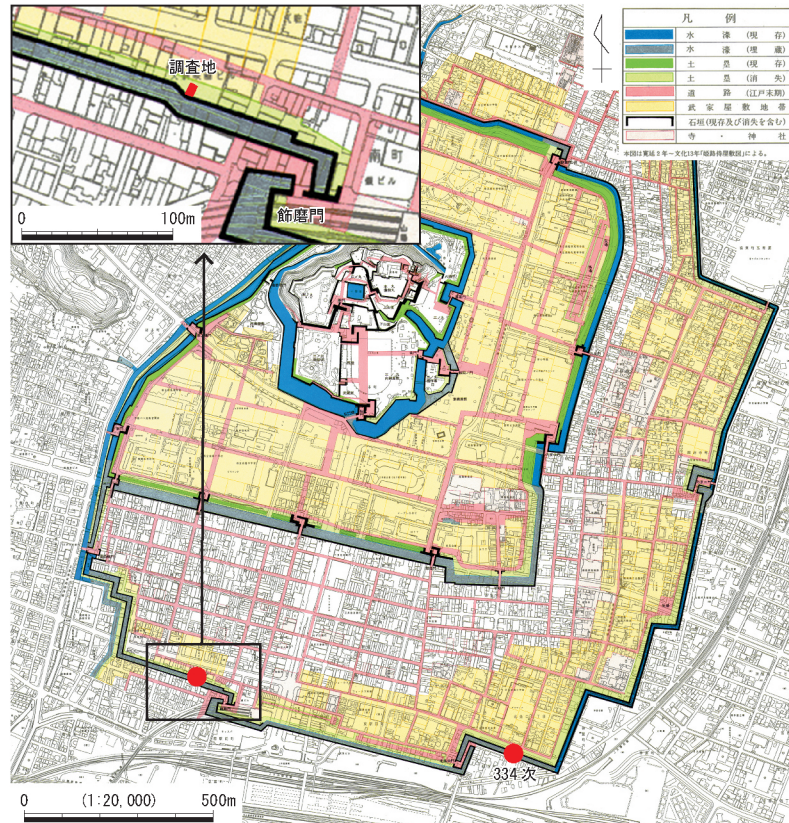


図1 調査区位置図 (S=1:20,000・1:5,000)

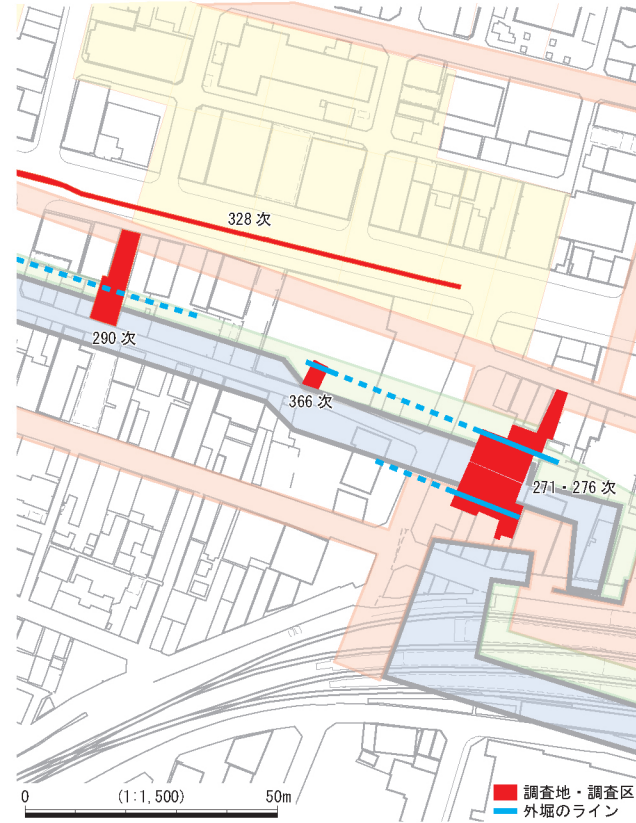


図2 調査地近辺の外堀ライン (S=1:1,500)



図3 3次元測量点群図 石垣平面 (S=1:50)



図4 3次元測量点群図 石垣立面 (S=1:50)

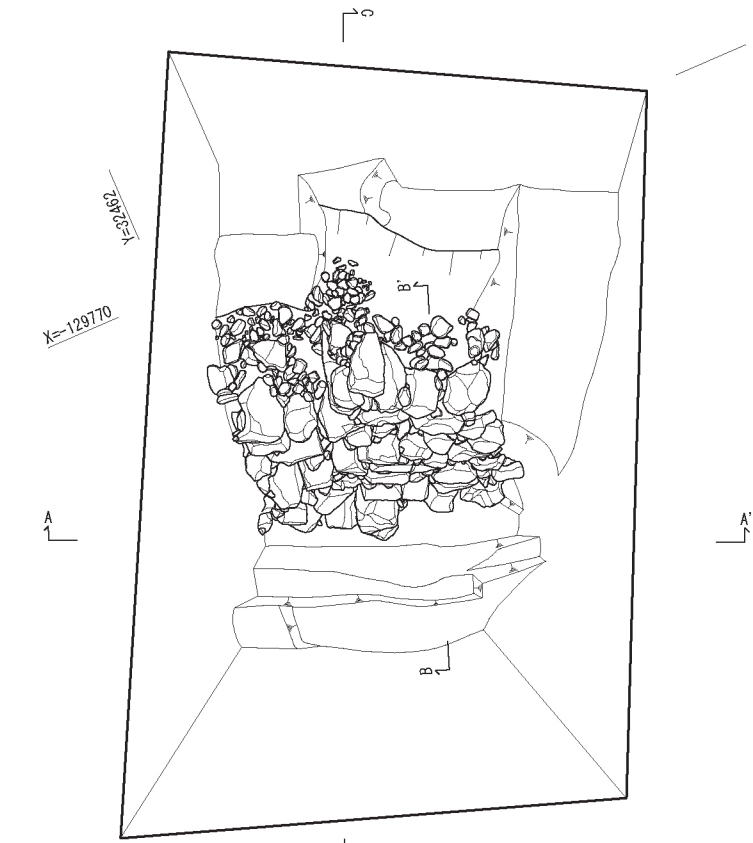


図5 調査区平面図 (S=1:80)

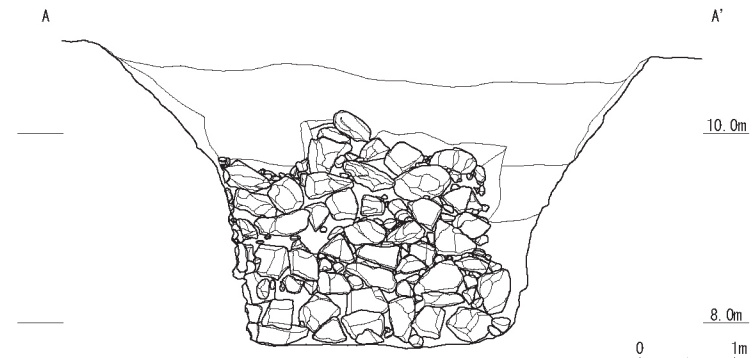


図6 石垣立面図 (S=1:80)

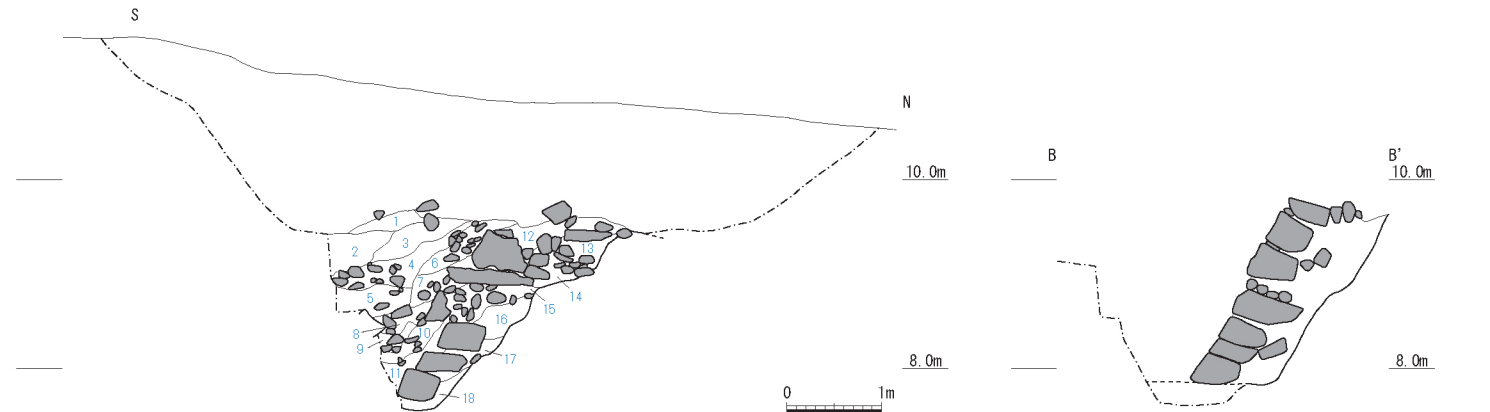


図7 調査区西壁断面図 (S=1:80)

土層注記  
 1. N4/1 粘土層:粘土,しまり弱,粘性強,炭を含む,近代の土層。 2. N5/1 粘土層:粘土,しまり弱,粘性強,炭を含む,近代の土層。 3. 2.5Y6/1 粘土層:粘土,しまり弱,粘性強,炭を含む,近代の土層。 4. 2.5Y6/1 粘土層:粘土,しまり弱,粘性強,近代の土層。 5. N5/1 粘土層:粘土,しまり弱,粘性強,炭を含む,近代の土層。 6. 2.5Y6/1 粘土層:粘土,しまり弱,粘性強,炭を含む,10～20cm大の円礫を多く含む,近代石組溝裏込土。 7. 2.5Y5/1 粘土層:粘土,しまり弱,粘性強,10cm大の円礫を多く含む,近代石組溝裏込土。 8. 2.5Y6/1 粘土層:粘土,しまり弱,粘性強,10cm大の円礫を多く含む,砂が層状に入る。 9. 2.5Y7/2 粘質土層:粗砂,しまり弱,粘性やや弱,10～20cm大の円礫を含む。 10. 2.5Y7/2 粘質土層:シルト,しまり弱,粘性強,10cm大の円礫を含む。 11. 10YR6/2 砂礫層:砂礫,しまりやや弱,粘性なし,5cm大の円礫をまばらに含む,地山由来の土層。 12. 10YR6/1 粘土層:粘土,しまり弱,粘性強,炭を含む,20cm大の円礫を多く含む。 13. 2.5Y6/2 粘質土層:細砂,しまり弱,粘性強,20～30cm大の円礫を多く含む。 14. 10YR6/2 粘質土層:粘土,しまり弱,粘性強,20～30cm大の円礫を多く含む,石垣裏込土。 15. 2.5Y7/3 粘質砂層:粗砂,しまり弱,粘性弱,20cm大の円礫を多く含む,石垣裏込土。 16. 10YR6/4 砂層:粗砂,しまり弱,粘性なし,薄い粘土層と砂層の互層がみられる,石垣裏込土。 17. 2.5Y7/2 砂礫層:砂礫,しまり弱,粘性なし,5cm大の円礫を多く含む,石垣裏込土。 18. 2.5Y6/1 砂礫層:砂礫,しまり弱,粘性やや弱,3cm大の円礫とその間に灰色粘土がかむ,石垣裏込土。

図8 石垣断面図 (A-A') (S=1:80)